

吉澤清美先生のご退職によせて

外国語学部教授
名部井 敏 代

吉澤先生は、私にとってこの上ない「メンター (mentor)」の存在です。縁あって関西大学でお仕事をいただくようになった時から、貴重な相談相手として、良き先輩として、ずっと暖かく見守っていただきました。

私の記憶に間違いがなければ、非常勤講師として関西大学にお仕事を頂いた時の「担当者説明会」でお会いしたのが最初だったと思います。全学共通教養外国語科目（英語）の担当者として、知っておかなければならない様々な教務事項の連絡をしてくださったのが、当時教務委員を務めていらっしやった吉澤先生でした。先生の言葉遣いはたいへん丁寧で、非常勤講師への心遣いがよく感じられました。しかし全学部で等しく「関西大学の外国語指導」が行われるよう、教育方針や指導・実践上の留意事項について説明するお声には、厳しさがありませんでした。初めてお会いした吉澤先生から感じた気遣いと仕事への厳しさは、その後、様々な場所で確認することになりました。

吉澤先生は、とてもほっそりされていらっしやいます。でも、そんな華奢な外見からは想像できない強固さと粘り強さをお持ちです。（随分前のことになりますが）ご一緒にさせていただいた入学試験に関わるお仕事では、常に毅然としていて、その背中がいつも大きく見えていました。この仕事は神経をすり減らす大変な仕事です。チームで行う作業では、作業日当日にチームメンバー全員がスムーズに作業に入れるよう、責任者として事前に詳細な計画指示書を作成してくださいました。また、メンバー間で複数の意見が出た時は、責任者として最終的な決断を下す必要も多くありました。当時は本当に人手が足りず、大きな事故をおこさないように常に緊張を強いられていました。さまざまな逆境にも関わらず、この仕事の社会的責任と従事するチームメンバーの業務負担に厳しい目を向け、責任者としてバランスの取れたリーダーシップを常に発揮してくださいました。

研究においても、吉澤先生は芯の通った研究を一貫して行っていらっしやいます。特に近年は英語での多読と言語能力の向上および英語学習に関する興味・関心などの情意面の変化に関わる研究を継続的に行い発表していらっしやいました。外国語習得のプロセスは時間がかかるもの、そして多くのインプットが必要なものという認識を明確にもった先生の姿勢は、学習環境作りにも反映されてきました。岩崎記念館一階ロビーには多くの多読用図書が準備されていますが、こうした図書設置の始まりは吉澤先生の働きかけがきっかけでした。

まじめさ、厳しさ、熱心さが先立ってしまいました。吉澤先生はとても柔和で親しみやすい方でもあります。まだ本学で英語の入学試験に筆記問題があり、文学部と外国語教育研究機構の英語教員約30名が集まって採点をしていた頃のこと。当時も、吉澤先生は責任者の一人として寡黙に業務に集中されていましたが、その近くで、初めての採点作業に集中力を切らした私は、他の休憩中の先生がたと雑談をしていました。当時ブームになっていた「冬ソナ」が、どのように面白くてハマってしまったのか話していると、厳しい背中を見せていらした吉澤先生がくるっとこちらをご覧になって、「そのドラマ、本当に昭和の雰囲気があって面白いですよ」と、にっこり笑いながら話に加わってくださったのを今でも思い出します。お仕事のときの厳しさとは一転、とてもきさくで優しさが出た瞬間でした。

先生は、私にとって尊敬する先輩であり助言者でした。私の研究テーマに関心をもって、着任早々に大学院の授業に招いて「教室内 SLA 研究」について話をする機会をくださったのも先生でした。実際、研究活動では先生にいろいろご助言をいただきました。ご一緒させていただいた研究活動では私の至らなさが多くあり、言い訳のことばもありませんが、先生とはいつも興味深い議論を重ねることができ、私のこの上ない財産になっています。

吉澤先生、長い間ありがとうございました。個人的には、「今後ともご指導のほど、よろしくお願ひいたします」と申し上げたい気持ちでいっぱいですが、きつとご家族とゆっくりされたいですよね。どうぞご健康に留意され、マイペースでご活躍されることをお祈りしています。